Japanese Association of Educational Psychology

教育心理学研究, 2008, 56, 127—141

〔展　望〕

自己愛的自己調整プロセス

——一般青年における自己愛の理解と今後の研究に向けて——

中　山　留美子*

青年の自己愛傾向が注目され，近年国内外において多くの研究がなされるようになった。しかし一方で，それらを概観し，知見を統合する試みはほとんどなされていない。本稿は，正常な人格における(特に青年の) 自己愛について，主に自己愛人格目録 (NPI) を用いてなされた実証的な先行研究を扱い，自己調整的な枠組みから，自己愛に関してこれまでに明らかになってきた知見を整理することを目的とした。そのなかで，(自我)脅威を調整変数として捉えることの重要性が議論され，これまでの研究の問題点や今後の研究の方向性が議論された。また，本稿では脅威を調整変数として位置づけることにより，自己調整的な視点から自己愛を理解するための新たなプロセスモデルを提案した。おわりに，青年の自己愛の意味および適応性について検討するための枠組みとしての本モデルの有効性について議論した。

キーワード：自己愛，自己愛的自己調整プロセス，(自我) 脅威，NPI，青年期

はじめに

自己愛概念はそもそも精神分析学の領域において，人格がある種の障害をきたした状態を指し示すために用いられるようになった概念である。しかし自己愛的として示される種々の特徴は，臨床的な問題をもたない人格 (以下,正常な人格)，特に青年においては一般的にみられるものであることが指摘され,「青年の自己愛傾向」,「準臨床的 (subclinical) な自己愛傾向」などとして用いられるようになった。今では，自己愛は青年期を理解するうえで重要な概念の一つとして位置づけられるようになり，一般青年を対象として，国内外で数多くの研究がなされている。これらの研究の直接的な契機となったのが，Raskin & Hall (1979) による Narcissistic Personality Inventory (自己愛人格目録；以下 NPI) の開発である (自己愛測定の歴史については Emmons, 1987；上地・宮下, 1992；小塩, 2004 を参照)。

実証的な先行研究では，主に NPI によって自己愛的な者に特有の認知的，感情的，行動的側面における多様な側面について検討がなされてきた。そしてこれまでに，青年の自己愛についての知見はある程度蓄積されてきたといえよう。しかし，検討されてきたそれぞれの側面の有機的な結びつきについてはほとんど議論がなされていない。

* 日本学術振興会・名古屋大学大学院
nakayama@nagoya-u.jp

また，青年あるいは正常な人格において見られる自己愛について，(自己愛人格障害に関する) 理論的研究に基づく議論はあっても，実証研究の知見に基づき改めて議論がなされていないのが現状である。自己愛的であるとされるそれぞれの特徴がどのように関連しあっているのか，あるいは自己愛がどのような心的プロセスと関連するのかということについて議論し知見を整理することは，正常な人格における自己愛を体系的に理解し，その適応的，発達的な意味を考えるうえで，きわめて重要である。

本稿は，自己愛を自己調整 (自己価値調整) への動機づけとして捉え，自己調整的な枠組みから自己愛に関してこれまでに明らかになってきた実証的知見を整理することを目指す。そして，整理された知見をもとに正常な人格における自己愛について改めて考察し，それらを踏まえて自己愛的な自己の仕組みを理解する枠組みを提案する。そして最後に，今後の研究課題とすべき点について述べたい。

自己調整への動機づけとしての自己愛

Bushman & Baumeister (1998) によれば，自己愛は，自分の全体としての良さに関する確信というよりも，優越性を築き上げるための情動的投資であり，自己肯定的な認知そのものよりも動機づけや感情の問題である。同様に，Rhodewalt (2001, Figure 1) は自己愛を社会・認知的な自己調整過程として捉え，自己愛的

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

な自己知識，自己評価が関連しあうことで生起する自己調整過程が社会的相互作用を規定し，あるいは社会的相互作用によって自己調整過程が規定されるとする考えを下に，一連の研究を行っている(Social/cognitive self-regulatory model of narcissism：自己愛の社会・認知的自己調整モデル，Morf & Rhodewalt, 1993；Rhodewalt, 2001；Rhodewalt & Morf, 1995, 1998；Rhodewalt, Sanbonmatsu, Tschanz, Feick, & Waller, 1995)。

近年の理論的な自己愛研究においても自己愛は自己調整的に論述されており，また自己調整への欲求のみならず，それを達成しようとする過程までを含んで概念化されている。例えばStrolow (1975) は，それまでの自己愛概念の用法を整理したPulver (1970) を参照しながら，自己愛を「自己像がまとまりと安定性を保ち，肯定的情緒で彩られるように維持する機能」と定義している。Westen (1990) は，自己愛，自己中心性，自己概念，自尊感情などの概念を整理するなかで，“自己愛は自己への認知的・情緒的なとらわれと厳密に定義されるべきである”と指摘している。

また，Morf & Rhodewalt (1993) によれば，自己調整的な自己愛の定式化は特に対象関係論者ら（彼らによればHorney, 1950；Kernberg, 1975；Kohut, 1977；Reich, 1960など)によって支持されており，理論家たちは，自己愛者における自己（評価）調整欲求が，彼らが自分のもつ理想的で非現実的な自己像の現実化を常に希求している結果であるという点で合意している。つまり自己愛的な人は，非常に肯定的な自己評価を維持するという目標に向かい，さまざまな認知的・行動的な自己調整方略を用いていると考えられるのである。

このように，近年の実証的・理論的な自己愛研究は自己愛を自己調整的な働きをもつものとして捉えており，自己愛を“動機づけ”として理解すること，すなわち高い自己評価や自己高揚欲求が一連の自己調整プロセスをもたらすことを含めて捉えることは，有力な自己愛理解の視点といえる。

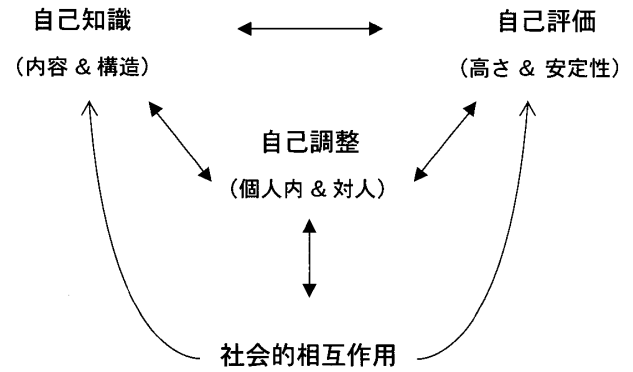

Figure 1 自己愛の社会認知的自己調整モデル（Rhodewalt, 2001）

自己愛的自己調整に関する実証研究

以上のような視点により，本稿ではまず，自己愛によりもたらされる自己調整の内容について先行研究を概観していく。自己愛がある種の自己調整プロセスに関連することは，これまで，相関的，実験的ないくつもの研究において検討されてきた。ここでは，Rhodewalt (2001) の枠組みを参考に，先行研究の内容を自己調整として検討されてきた現象の質から3つに分けて整理することとする。

3つの内容とは，認知的な方略によるもの（認知的自己調整)，対人的な方略によるもの(対人的自己調整)，達成行動による自己調整（行動的自己調整）である。これらの自己調整方略は，その性質により区別される。すなわち，認知的方略による自己調整では，自己の認知を歪めることによって自己評価を維持しようとするが，他方対人的方略では，他者に働きかけることで自己調整を行おうとする。ここで対人的方略は，他者に行動的働きかけ（攻撃）を行うことで自己評価を維持しようとするものであるが，行動を伴うものだけでなく前段階となる感情状態（敵意や怒りの感情）を含めることとする。同様に他者が関係する方略でも，認知的方略に終始するもの，例えば他者評価を下げることによって自己評価を維持しようとする「見下し」は認知的自己調整に含める。また，行動的自己調整には，対人的な自己調整行動を含めず，自己の能力評価を高めようとして行う実際の行動（達成行動）のみを扱うこととする。

認知的自己調整に関する先行研究

自己愛は認知的な自己高揚過程に関連すると考えられている。これまで，主に実験的な方法を用いて自己高揚バイアス（＝自己のパフォーマンスを高く見積もる；John & Robins, 1994, 相対的に自己を高く評価する；Farwell & Wohlwend-Lloyd, 1998)，他者卑下（＝自分より優れた他者を低く評価する，または自分を低く評価した他者の能力や技術を低く評価する；Farwell & Wohlwend-Lloyd, 1998；Kernis & Sun, 1994；South, Oltmanns, & Turkheimer, 2003；Smalley & Stake, 1996)，帰属バイアス（＝成功を内的安定的に帰属する；Campbell, Reeder, Sedikides, & Elliot, 2000；Emmons, 1987；Farwell & Wohlwend-Lloyd, 1998；John & Robins, 1994；Rhodewalt & Morf, 1995；Stucke, 2003, 失敗を外的に帰属する；Kernis & Sun, 1994；Stucke, 2003)，過去の記憶想起におけるバイアス（Rhodewalt & Eddings, 2002）など，さまざまな自己調整方略が検討され，いずれの研究も自己

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

愛がこれらの方略を用いた自己高揚過程に関連することを示している。

対人的自己調整に関する先行研究

他者に対して怒りの感情を抱き表出することが，自己愛と関連する対人的側面として検討されてきた。特に近年では Baumeister らが，自己愛的な者における攻撃行動を，自己評価を下げうる脅威状況において自己評価を維持しようと防衛的に反駁する形で表出されたものであるとするモデルを提示し，このモデルに基づく研究を行っている（Threatened Egotism Model : 自己本位性脅威モデル, Baumeister & Boden, 1998 ; Baumeister, Bushman, & Campbell, 2000 ; Baumeister, Smart, & Boden, 1996 ; Figure 2)。

湯川（2006）によると，怒り感情は「自己もしくは社会への，不当なもしくは故意による（と認知される）物理的もしくは心理的な侵害に対する，自己防衛もしくは社会維持のために喚起された，心身の準備状態」と定義される。よって，怒りは自己調整のための有効な手段の一つであると捉えられる。同様に，怒りの表出も，自己調整の一手段であると考えられるが，表出された怒りの程度や行動の内容（暴力など）によっては，社会的環境，ひいては自己評価を脅かしかねないものである。よって，怒り表出を考える場合，どのように怒りを表出するか，ということを含めて議論することが重要であろう。

自己愛と怒り表出行動の関連について，国内でいくつかの研究がなされている。例えば日比野・湯川・小玉・吉田（2005）は怒り表出行動について，中学生に対して過去の怒り経験(1つ)とその出来事に関する感情・認知・行動を尋ね，質問紙による検討を行っている。その結果，自己愛の一側面である注目・賞賛欲求が感情反応（怒り）を介して，攻撃行動（怒りの対象への攻撃）や社会的共有(第三者に話して怒りを沈静化する)，物への転化(物にあたるなどして怒りを沈静化する)と関連していることを示している。

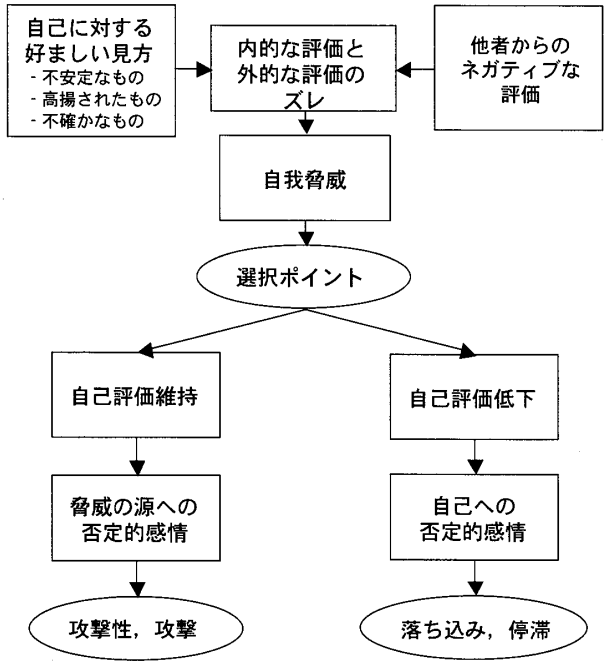

Figure 2 自己本位性脅威モデル（Baumeister et al., 1996）

また，怒り表出の正当性について阿部・高木（2006）は，大学生を対象に物語の提示による質問紙実験を行い，注目・賞賛欲求の高さが加害者の被害認知，責任認知の大きさに影響し，それを介して怒り表出の正当性評価を高めることを示した。

しかし一方で，これらの研究で報告された，自己愛のもつ攻撃行動の予測力は非常に小さいものである。日比野ら（2005）では，注目・賞賛欲求から怒り，怒りから攻撃行動への予測力はパス係数で.11から.23の大きさであり，阿部・高木（2006）では注目・賞賛欲求から被害認知，責任認知への予測力はパス係数で.08,.11とごく弱いものであった。

自己愛と攻撃性の関連について，Washborn, McMahon, King, Reinecke, & Silver（2004）は自己報告，教師報告，仲間報告による児童生徒(5年生から8年生)の攻撃性について検討し，自己愛が自己報告の攻撃性のみを予測することを明らかにしている[1]。この知見からは，自己愛的な人が実際には，周囲から「攻撃的な人」と認知されるほどの攻撃行動を行っていない可能性が推測される。

これらの先行研究から，自己愛が特性的（安定的）な攻撃性というよりも，脅威状況における自己調整を目的とした攻撃性，攻撃行動に強く関連していることが予想される。この予想に関し Bond, Ruaro, & Wingrove(2006)は，自己愛は課題実施前の怒りには関連せず，課題実施後の怒りにのみ関連すること，自己愛が怒りへのアクセシビリティの高さを予測しないことを示している。すなわち，予め怒りなどの変数について測定した対象者に対して批判，拒否，無視などに関する状況を記した文章を2種類読ませ，それぞれに対して怒りの評定および反応時間課題を実施したところ，自己愛は課題実施後の怒りのみと関連し，課題実施前

[1] 自己報告による怒り，敵意，攻撃性などと自己愛が関連することは，Ang & Yusof (2005), Collani & Werner (2005), Raskin, Novacek, & Hogan (1991), Rhodewalt & Morf (1995), 湯川（2003）などによっても示されている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

の怒りとは関連をもたないことが示された。また，Bushman & Baumeister (1998) は自己愛と否定的フィードバックの相互作用が高いレベルの攻撃性を予測すること，自己愛が（脅威をもたらした他者でない）第三者に対する攻撃性は予測しないことを示している。

Twenge & Campbell (2003) では，自己愛が社会的拒絶を介して攻撃に関連し，社会的に受容された場合には高い攻撃性を示さないことが報告されている。さらに，阿部・高木 (2006) では，自己愛から被害認知，責任認知へのパス係数はごく小さいものの，被害認知や責任認知から怒り喚起へのパス係数は中程度に高い (.37, .53)。したがって，被害認知や責任認知が媒介変数としてではなく，脅威を感じるかどうかという調整変数として機能している可能性が示唆される。

行動的自己調整に関する先行研究

行動的な自己調整過程として，達成行動を挙げることができる。現実の自己を変えることなく認知を歪めたり他者に働きかけたりすることによって自己評価の安定を図ろうとする上述の諸方略とは違い，達成行動は実際に能力を向上させることに関わる行動をとることにより自己評価を高揚あるいは維持・回復させる方略である。

自己愛と達成行動の関係について，Wallace & Baumeister (2002) は4つの実験を通して慎重な検討を行った結果，自己愛がチャレンジレベルの高い場合のパフォーマンスと関連していることを明らかにした。すなわち彼らの研究結果によれば，自己愛は自己高揚の可能性が高い場合の達成行動において特に，努力や集中力を発揮するのである。また，Morf, Weir, & Davidov (2000) は，自己愛的な人が特定の状況においてのみ課題に対して内発的に動機づけられることを示している[2]。

他の心的機能との共通点と相違点

これまでの知見から，自己愛的な人はネガティブな結果に対して認知を歪めたり，対人的・個人的な特定の行動をとることで自己調整を図っていることが実証されているといえよう。しかし，自己をポジティブなものに保つ自己調整は適応にとって重要な心的機能であり，自己愛にかかわらず一般的にもみられるものであると考えられる。

例えば，自己評価を高く見積もることは自己愛的な人に限らず一般的な傾向であるとされ (Taylor, 1989 ; Taylor & Brown, 1988 など)，ポジティブイリュージョンとして研究がなされてきた。また，自尊感情がネガティブフィードバックを最小化することも指摘されている (Blaine & Crocker, 1993 ; Shrauger, 1975)。

これに関し，自己愛の効果とポジティブイリュージョンや自尊感情の効果とを比較した研究がいくつかある。

John & Robins (1994) は，ポジティブイリュージョンの効果と自己愛による効果を比較し，後者の効果が前者よりかなり大きなものであることを示している (p.216)。Smalley & Stake (1996) は，ネガティブフィードバックに対する自尊感情の効果と自己愛の効果とを比較検討しており，その結果，自尊感情はフィードバックの基準となったテストの内容についてネガティブな評価をすることと関連していたのに対し，自己愛はテストの評価者に対してネガティブな評価をしたり，敵意を向けたりすることと関連することを明らかにしている。

また，ポジティブフィードバックに対して評価者の能力を高く見積もり，ネガティブフィードバックに対して評価者の能力を低く見積もることに，自己愛と自尊感情がそれぞれ独自の説明力を持つことを示す研究もある (Kernis & Sun, 1994)。さらに Bushman & Baumeister (1998) は，攻撃行動に関して自己愛と自尊感情の効果を検討し，自己愛には交互作用効果が見られたが，自尊感情では有意な効果が見られないことを示した。他にも，先行研究のいくつかは自尊感情を共に扱って自己愛の独自効果の抽出を試み，同様の知見を得ている。

このように，これまで知見からは，自己愛が内的（認知的・感情的）な自己調整に関して，他の心的機能，すなわちポジティブイリュージョンや自尊感情の効果とは別の，独自の効果をもつことが，実証的に示されてきているといえるだろう。

脅威への反応としての自己調整

さて，攻撃性や達成行動についての議論から，自己愛的自己調整は常に起こるものではなく，自己愛的な当人にとっての自我関与が強い領域（課題）において自

[2] 一方，自己愛がセルフハンディキャッピング行動と関連することも指摘されているが，Rhodewalt, Tragakis, & Finnerty (2006) の実験（実験2）ではセルフハンディキャッピングがテスト後の能力評価における自己高揚を予測しないことが示唆された。セルフハンディキャッピング行動は現実的に能力を拡大するものではないため長期的には適応的な行動ではないと考えられるが，このような行動をとることがどのような意味を持つのかは今後彼らの知見を確認すると共に，検討していく必要があるだろう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

己評価に脅威がもたらされた場合に限って発動されるものであることが推測される。

この推測を支持する指摘が，John らによってなされている（John & Robins, 1993, 1994）。John & Robins（1993）は，情緒的にニュートラルで自我関与が弱い人格特性への評価についての自己高揚効果を検討したところ，自他評価の一致度が他者どうしの評定の一致度と同程度に高いことを示し，その結果から，自我関与が弱く自己評価に脅威が及ばないような状況では，そもそも自己高揚は起こらないと指摘している。そして彼らはこの結果から，自我関与が弱い場合には自己愛は自己高揚バイアスを通した自己知覚を行わないことを推論している（John & Robins, 1994）。

また，Morf & Rhodewalt（1993）は，脅威の対象ではない第三者の評定において自己愛の効果は見られず，自己愛が効果を持つのは脅威の対象に対してのみであることを明らかにした。よって，敵意感情もまた，自己評価への脅威を及ぼした対象に対して選択的・特定的に向けられるものであると考えられる[3]。

以上の議論から，自己愛と認知，行動的な自己調整との関連は，調整変数としての「脅威（自我脅威）」によって説明されることが示唆される。そしてまた，先行研究の一部は脅威事態を実験的に用意し，このような考えに基づいた検討を行ってきたといえるだろう。

自己愛的自己は特殊な構造をもつのか

しかしながら，多くの研究が，脅威を媒介変数として位置づけている。すなわちこれまでの研究において，自己愛があらゆる状況において自我脅威の感じやすさを導くという前提が存在してきた。

このような前提は理論的ないくつかの指摘に支えられているものと考えられる。例えば理論的には自己愛的自己が構造的欠陥を持っていることが指摘されており（例えば Bach, 1977），この考えに基づけば，自己愛的な人は自己愛的でない人とは自己の構造が異なっていると考えられる。また，自己愛的な人は目標や理想自己が高すぎるために自己評価を脅かされやすいという指摘もある（Rhodewalt, 2001）。この指摘によれば，自己愛的な人は目標の高さによって特徴付けられるが，それが原因となって自我脅威にさらされやすいと考えられる。以下では，自己の構造および目標の視点から，自己愛的な人における脅威の感じやすさについて先行研究を概観しながら考察する。

自己愛的自己の構造に関する研究

自己愛的な自己の構造については，アクセシビリティと自己複雑性，評価的統合の側面から実証的検討がなされてきた。

アクセシビリティについて，Tschanz & Rhodewalt（2001）は特性描写に関する me-not me 判断課題を用いた反応時間パラダイムによる実験的検討を行っている。その結果，プライム刺激を自伝的情報（「あなたは先月友好的なふるまいをしましたか？」）とした場合と，社会的評価情報（「あなたの母親はあなたを友好的な人だと思っていますか？」）とした場合とで反応時間に差は見られず，また，プライム刺激がない場合の自己評価速度とも差が見られなかった。この研究における実験の一つでは社会的知識に関して，社会的評判情報をプライムにした場合の反応時間が早いという結果が得られているが，この結果も反復されなかった（Rhodewalt, 2001）。すなわちこの研究の結果からは，自己愛的な自己における自己知識のアクセシビリティは，自己愛的でない人のアクセシビリティとの差がないことが示唆される[4]。

自己知識の分化度の指標である自己複雑性に関しては，自己愛と情緒的反応性との関連から議論がなされている。自己複雑性が低いと情緒的反応が高くなることが指摘されている（Linville, 1985 など）ことから，Emmons（1987）は，自己愛とポジティブ・ネガティブな感情の多様性との関連を自己複雑性が調整している可能性を示唆している。しかし，Rhodewalt らによる一連の研究では，自己愛の高い人の自己複雑性が低いという一貫した証拠は得られていない（Rhodewalt, 2001 ; Rhodewalt, Madrian, & Chaney, 1998 ; Rhodewalt & Morf, 1995）。

評価的統合は Showers（1992a, 1992b）により提唱された概念であり，自己に関連するポジティブ，ネガティブな情報の相互連結性の程度の指標である。評価的統合が低いことは自己のある側面に対するポジティブな情報とネガティブな情報の結びつきが弱いことを示し，よって評価的統合の低い人は，例えばネガティブな情報が与えられた場合に，ネガティブな情報しか活性化されず，それを緩衝する情報を取り出すことができに

[3] 相関による先行研究において示される自己愛と敵意感情の相関は，自己愛人格における特性的な敵意感情と捉えることも可能であるが，これまでの議論から，自己愛的な人が誰に対しても敵意感情を抱きやすいと解釈することは妥当ではないだろう。

[4] したがって当初の研究目的にもかかわらず，この論文は自己愛とアクセシビリティの関係についてはおも立って述べていない。この結果は本文中では脚注に示され，さらに Rhodewalt（2001）において解説されたものである。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

くい（自己がネガティブ情報の影響を受けやすい）。Rhodewalt et al.（1998）は評価的統合の指標（ϕ）と自己愛との関連を2つのサンプルを用いて検討し，その結果これらに関連がないことを示している。

これらの研究結果は全て，自己愛的自己と自己愛的でない自己には構造的な違いがないことを示唆するものであるといえる。

自己愛的自己調整の目標

それでは，自己愛的な人における脅威の感じやすさは何によって説明されうるのだろうか。次に，1）自己評価の高さ，2）重要度の高い自己概念という2点から先行研究を整理することにより，3）自己愛的自己調整の目標について考察する。

1）自己評価の高さ

自己愛は「（非現実的で）肯定的な自己評価」が脅威にさらされたときに活性化される自己調整過程である。よって，自己愛の目標（対象）は，高い自己評価を保つことであると考えられる。

自己愛と自己評価の高さの関連について検討した先行研究を見ると，自己評価の指標としては大きく，自己に関する全体的な評価の指標である自尊感情と領域に特化した自己評価の2種類が扱われている。

まず，自尊感情に関しては，Rosenberg（1965）の自尊感情尺度などとの関連が検討され，自己愛と自尊感情の高さが正の関連を持つことが繰り返し示されてきた（Campbell, Rudich, & Sedikides, 2002；Emmons, 1984；Jackson, Ervin, & Hodge, 1992；Kernis & Sun, 1994；小塩, 1997, 2001；Raskin, Novacek, & Hogan, 1991；Rhodewalt & Morf, 1995, 1998；Sedikides, Rudich, Gregg, Kumashiro, & Rusbult, 2004；Watson, Taylor, & Morris, 1987；$.21<r<.50$）。

また，領域に特化した自己評価に関して，Farwell & Wohlwend-Lloyd（1998）が学業成績を扱った検討を行っている。彼らは大学生を対象として心理学の授業についての最終的な成績の予測と現在の能力評価の2側面から自己評価と自己愛の関係について検討した結果，自己評価と自己愛との間に正の相関関係を見出したと報告している。しかしこの研究では成績予測と自己愛の諸側面との関連は弱いものであり（$-.02<r<.21$），また，実際の成績と自己愛の間の相関も弱く（$r=.20$），過大評価している度合いはそれほど大きくないことも示された（自己愛高・中・低群に分けて，実際との差分の平均は高群で＋.12，中群で＋.08，低群で-.09）[5]。また，Jackson et al.（1992）では身体に関する自己評価を扱い，Body-Self Relations Questionnaire（BSRQ, Winstead & Cash, 1984）や Bem Sex Role Inventory-Short Form（Bem, 1981）との関連から，自己愛的な人は身体的外見（$r=.50$）や身体的適性（$r=.35$），男性性（masculinity, $r=.54$）を高く評価していることが明らかにされた。

これらの知見から，自己愛的な人は全体的に高い自己評価を持つが，領域ごとに見てみると，高く評価していると考えられる領域と，人によって自己評価の分かれる領域があることがわかる。

2）重要な自己概念

重要度の高い自己概念は同時に脅威を受けやすい自己評価領域でもあると考えられ，自己愛的自己調整過程を活性化しやすくすることが予想される。

自己愛的な人の重視する自己知識や自己概念については，種々の属性の重要度評定を求めた研究から，その特徴を知ることができる。Rhodewalt & Morf（1995）は大学生に対して知性・身体的魅力・リーダーシップなどの内容からなる Self-attributes Questionnaire（SAQ, Pelham & Swann, 1989）を実施し，同時に各項目として挙げられている属性の重要度について尋ねている。これらの関連を検討した結果，SAQ と重要度との関連は $r=.41$ と中程度に強い関連が見られ，ここからは，自己愛的な人にとって知性や身体的魅力などの自己概念が重要な位置づけにあることが示唆される。また，Jackson et al.（1992）が，自己愛と BSRQ との関連を検討したところ，身体的外見の重要度との間に有意な関連が見られ（$r=.23$），ここからは自己愛的な人が身体的外見に関する自己像に重きを置いていることが示唆される。

自己愛的な人の理想自己について検討した研究もいくつか存在し，そこでは自己愛的な人の理想自己の内容について，攻撃的でサディスティックであり，管理的で専制的，自己愛的で競争的な人物になりたいと思っている傾向が高いこと（Raskin & Terry, 1988）や，「自分に満足した」「強い」「主張できる」「前向きな」「明るい」「素直な」などの記述が多いことが示されている（小塩・小平, 2005）。自己愛的な人では，理想自己の内容と現実自己の内容とが一致している傾向にあることが示されており（Emmons, 1984；小塩・小平, 2005；Raskin & Terry, 1988）[6]，ここからは，現実の自己像として報告される自己概念の内容が，維持すべき現状の自己とい

[5] また，成績予測は現在の能力を査定した上での予測という意味だけでなく，今後の能力の伸びに対する期待も含んでいると考えられ，自己評価の指標として曖昧である。なお，実際の成績よりも低く見積もった学生は23%であり，自己愛にかかわらず多くの学生が実際より高い見積もりをしていることも明らかにされている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

う意味と達成したい理想の自己という2つの側面をもっていることが予想される。

また，自己愛尺度（NPI）の内容そのものも，理論的な研究において指摘されてきた自己愛的な現実・理想の自己概念を強く反映したものであるといえる。例えばNPIの短縮版であるNPI-S（小塩, 1997, 1998）では，行動的側面（「私は自分の意見をはっきりいう人間である」「いつも私は話しているうちに,話の中心になってしまう」など）についても扱われているが，下位尺度である優越感・有能感尺度は自己愛的な人における現実の自己概念の特徴（「私は周りの人たちより優れた才能をもっていると思う」「私はどんなことでもうまくこなせる人間だと思う」）を，注目・賞賛因子は「私はみんなの人気者になりたいと思っている」，「私は人々の話題になるような人間になりたい」など，理想の自己概念の特徴を表すものと考えられ，主には自己愛的自己概念の特徴を項目化したものであると言えよう。

3）自己愛的自己調整の目標

自己愛は全体的な自己評価の高さである自尊感情と関連を持つが，領域特化の自己評価に関する知見および重要な自己概念の内容から，特に知性や身体的外見や身体的適性，男性性を高く評価することと関連することが明らかになった。全体的な自己評価（自尊感情）においてこれらの領域における自己評価は重要な位置づけにあると考えられる。よって自己愛的な人は，理想自己あるいは現実自己として報告される知性や外見などの重要な領域に関する自己概念の内容（しばしば両者は一致している）について，それらの評価が高く維持されるように機能するものであるといえるだろう。

自己愛と自我脅威の関連

以上の知見から，自己愛的な自己の構造には特殊性はないが，自己愛的な人には特定の領域（重要な領域）に関して高い基準や目標を掲げる傾向があり，その領域に関しては自己愛的な人が自己評価の脅威にさらされやすいと結論づけることができるだろう。例えばRhodewalt & Morf（1998）やStucke（2003）などは，実験において課題として「知性」に関するものを用いている。知性は自己愛的な人にとっての重要な領域（目標）であり，これらの研究で用いられた課題は自己愛の特徴を捉えるに適した課題であったといえるだろう。

一方でこれらの知見は，そもそも自己評価を高く維持したいと思わない（重要でない）領域についてネガティブな評価を受けた場合，自己愛はほとんど脅威と結びつかない可能性があることを示している。これまでの研究からは，自我関与の弱い領域において自己愛的自己調整が見られないことが明らかにされているし，場面想定法などによって報告された怒り場面（おそらく脅威の度合いが緩和されていると考えられる）に対する怒り表出行動などには強い影響力を持たなかった。

このような，自己愛的な人における（自我）脅威の生起メカニズムについて，Baumeister et al.（1996）のモデルが参考になる。彼らによれば，自我脅威は（高揚された）自己評価と他者評価のズレの関数として定義される。例えば，同様にネガティブな評価を受けた場合には，当該領域の自己評価が高い者が大きな脅威を感じることになる。逆に自己評価の高くない領域については自我脅威を感じにくい。よって，自己愛的な人があらゆる場面で脅威を感じやすいという前提は，ほとんど成り立たないといえよう。

相関的な検討により，自己愛と自己評価の不安定性について示した研究もある。Rhodewalt et al.（1998）は調査協力者に5日間（研究1）または6日間（研究2）の連続した自尊感情の評定を求め，自己愛と自尊感情の不安定さ（個人内標準偏差の大きさ）が関連することを明らかにしている（r=.41, 31）。小塩（2001）は，自己愛の下位側面と自尊感情の不安定さ，自己像の変動性の関連を検討している。そしてRhodewalt et al.（1998）同様の方法により算出した自尊感情の不安定性との関連から，下位側面の1つである注目・賞賛欲求が自尊感情の不安定性と弱い関連をもつこと（r=.16），Rosenberg（1965）のStability of Self Scaleをもとに作成した独自の尺度との関連から，自己像（自己概念,自己評価）の変動性と正の相関（r=.27）をもつことを明らかにしている。これらの研究は，自己愛的な人における日常的な脅威の感じやすさを示すものであるが，報告される関連の強さは研究によってばらつきがあり，これらからも，自己愛が必ずしも日常的な脅威の感じやすさと結びついていないことが予想される[7]。

---

[6] Emmons（1984）は，Self-Perception Inventory（Soares & Soares, 1965）を用いて理想自己と現実自己を測定し，自己愛の高い人は理想-現実自己間の不一致度が低い（一致度が高い）ことを明らかにした。Raskin & Terry（1988）は，128項目の形容詞と形容詞的表現から成るInterpersonal Check List（Leary, 1956）を，現実の自分（現実自己）の評定用とこうなりたい自分（理想自己）の評定用の2種類用意し，カテゴリーごとの個人内相関から現実-理想自己の一致度を測定して，自己愛と自己一致度との間に正の相関が見られることを示している（r=.28）。また，小塩・小平（2005）は，小平（2002）の提案した個性記述的な方法により理想－現実自己の不一致度を測定し，同様の結果を得ている（r=-.31）。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

自己愛的自己調整を捉えるモデル

ここで，これまでの議論を踏まえ，自己愛的な自己調整のプロセスを捉えうるモデルを考える。

これまでの議論において，自己愛的自己調整の発動を直接導く重要な要因として，「脅威（自我脅威）」を考える必然性が示唆された。また，この脅威はネガティブな評価を受けた場合に必ず認識されるという性質のものではなく，（自己愛的な）当人にとって，重要な自己の側面（知性，身体的魅力等）に対するネガティブな評価により導かれるものであり，脅威を感じるか否かということには個人差があることが示唆された（調整変数としての役割）。また，自己愛的自己調整には認知的，対人的，行動的な側面があり，自己愛的な人がいくつかの方略を組み合わせることによって自己評価の脅威に対処していることが明らかとなった。

このようなことを踏まえて自己愛的自己調整のプロセスを捉えようとすると，自己愛的な自己調整を捉えようとする既存のモデルとして位置づけられる Rhodewalt（2001, Figure 1）や Baumeister et al.（1996, Figure 2）のモデルにはそれぞれ問題がある。まず Rhodewalt（2001）のモデルでは，「プロセス」が表現されていない。他方このモデルは，本稿が先行研究を分類する参考にしたように，自己愛について検討されてきたさまざまな知見を分類し，それぞれの関連を考察するための枠組みとして非常に有用であるが，具体的にどのように自己調整が進むのかといったプロセスを捉えるには不適当である。

また，Baumeister et al.（1996）のモデルは，攻撃行動の原因を自己評価の高さに求めたモデルであり，他の自己調整方略については扱っていない。すなわちこれまでの議論からは，自己愛的自己調整方略には攻撃（怒り表出行動；本論文での対人的自己調整）のほかに，認知的な自己調整や達成行動を含む行動的な自己調整があることが明らかとなっているが，このモデルではそのような方略を扱っていない。このモデルにおいて，自己評価維持に従事した場合には必ず脅威の源（他者）への否定的感情が生じ，攻撃につながることが想定されている。しかし先行研究からは，否定的感情は評価基準に向けられることもあり，また，例えば外的に帰属することによって，怒りが調整されることも示されている（Stucke, 2003）。よって，このモデルは自己愛的自己調整の全体像を捉えるモデルとしては不十分である。

さらに，これまでのモデルでは，一般的な自己調整プロセスと自己愛との関連について言及されていない。自己調整的な心理プロセス（ポジティブイリュージョンやセルフサービングバイアス）は，多くの人に見られる一般的な傾向とされ，自己評価を下げるような事態に遭遇したときには，多くの人が少なからずこのような認知的対処を行い，自己を防衛しようとすると考えられる。そしてこれまでの議論から，自己愛は，記憶構造や使用する方略がそもそも異なる特殊な自己調整過程を説明する変数ではなく，一般的なものと同様のプロセスにおいて，プロセスの発動されやすさや選択される方略，その強度などを決める変数として機能していると考えられる。よって，自己愛的な自己調整過程について明確にするためには，一般的な自己調整過程の中に自己愛を位置づけることにより捉える必要があるだろう。

以上のようなことを考慮しながら，自己愛的自己調整を捉えるためのプロセスモデルを表し，Figure 3 に示した。このモデルでは，自己調整過程が生じるプロセスと自己愛との関連が，時間の流れに沿って表現されている。

ある状況（ネガティブ評価，失敗など）に直面したときには，はじめに自己（評価）に脅威がもたらされるかどうかが判断される。そして，脅威が認知された場合には，自己調整過程が発動する。ここで，自己愛的な人は，知性や身体的魅力など，重要な領域であるほど高い自己評価を形成するため脅威が生じやすく，この過程が発動されやすいと考えられる（Figure 3 矢印①）。

自己調整過程では，自己評価を維持するために効果的な調整の対象（他者，課題の困難度など）を選択し，認知的，感情的，行動的な対処が試みられる。そして，方略実行の強度の違いとして，自己愛的な人は自己愛的でない人に比べて，より積極的に対処方略を用いることがわかっている（Figure 3 矢印②）。すなわち，自己愛的な人は，例えば失敗の原因を外的に帰属したり，他

---

7 一方，自己愛が自己評価への確信や自己のまとまりの強さと正の関連をもつことを示した研究も存在する。Rhodewalt & Morf（1995）は，Texas Social Behavior Inventory（Helmreich & Stapp, 1974）の各項目について自己評価への確信の強さを尋ね，$r = .26$ の関連を報告している。また，中山（2005）は，自己愛と自我同一性の関連を検討し，NPI に類似した項目内容からなる誇大性尺度（中山・中谷, 2006）と自我同一性尺度（谷, 2001）の関連を検討し，自己愛が心理社会的同一性，対自的同一性，自己斉一性・連続性と正の関連をもつことを示している。ただしここでは自己愛の一側面である「評価過敏性」が同一性の諸側面と負の関連をもつことが示されており，この結果から，自己愛と自己像の変動性（脅威の受けやすさ）との関連について，自己愛の側面を考慮したうえで慎重に検討する必要性が示唆される。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

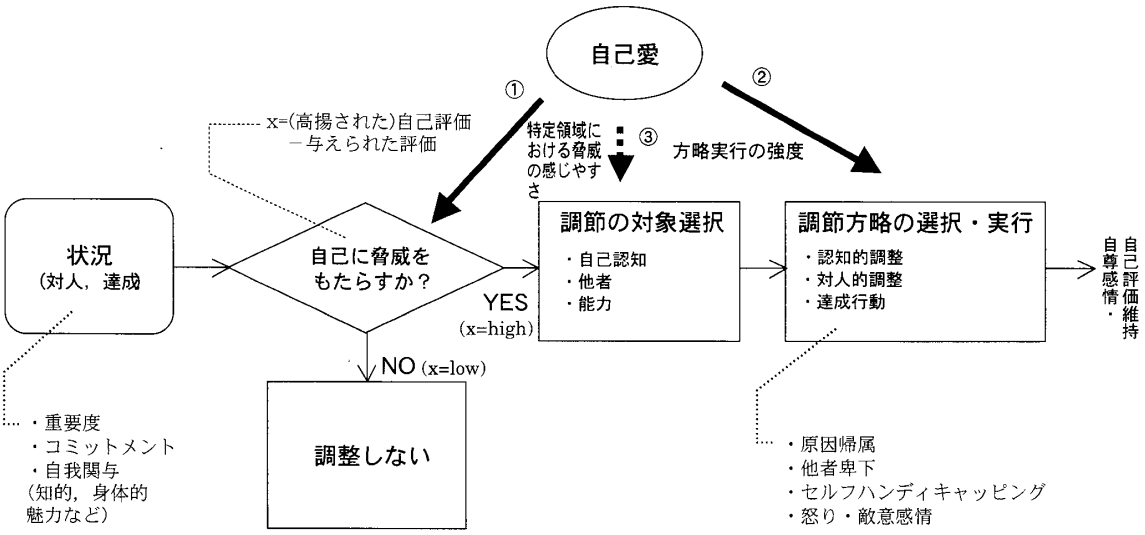

Figure 3 自己愛的自己調整プロセスを捉えるモデル

者を低く評価したり，記憶想起のしかたをコントロールすることによって，自己評価の低下を極力抑制しようと努力している。また，長期的には必ずしもよい意味を持たない攻撃行動や，努力により能力そのものの底上げを図ることにより，自己評価を調整・回復する場合もある。

ここで，ある状況においてどのような自己調整方略が選択されやすいかということについて，Smalley & Stake (1996) からは，自己愛的な人が，課題や評価者に対する見方を調整するという認知的な対処方略よりも，他者へ敵意などの否定的な感情を向けるという対人的な対処方略に依拠しやすい可能性が示唆される。しかし先行研究からは，常に対人的方略が用いられるわけではないことも明らかである。どのような条件下で怒り感情や攻撃行動が選択され，表出されるのかということについて議論するためには，今後，条件を統制したうえでさらに検討を行っていくことが必要である (Figure 3 矢印③)。

そして，このような自己調整過程を経て，自尊感情や自己評価が維持されると考えられる。ただしこの段階について，自己評価がどのように維持されるのかということを詳細に検討した研究はみられない。脅威前後の自己評価の変動について，例えば自己評価が脅威を受ける前と同じレベルに維持されるのか，あるいは反動として脅威を受ける前よりも高い自己評価が示されるのかということや，自己調整による効果がどの程度の持続性を持つのかということを扱って，今後検討がなされるべきであろう。

今後の研究への示唆

以上，先行研究を概観してきたまとめとして，自己愛的自己調整過程を捉えるための枠組みとなる新たなモデルを提案した。モデルでは，自己調整過程の各段階に自己愛がどのように関与しているのかという視点から自己愛的な自己調整過程について明らかにすることが目指され，その試みにより，一つの流れの中で知見を整理し，捉えなおすことが可能になったと思われる。

一方で，自己愛の働きの詳細について，まだ明確になっていない部分が多いことも明らかとなった。すでにいくつか挙げたが，以下では，本稿で提出したモデルに基づき，今後検討されるべきさらなる課題について述べる。

まず，脅威の種類やレベルをコントロールした詳細な検討が必要であると考えられる。これまでの研究において，状況，すなわち実験で扱われている当該領域が，実験協力者である個人にとってどれほど重要であり，大きな脅威をもたらすものであるのかということについてはあまり問われてこなかった。特に国内においては実験的なアプローチがほとんどなされておらず，自己愛の自己調整過程を直接的に捉えられていないのが現状である。

また，脅威の感じやすさについて，自己愛がある領域における脅威の知覚されやすさを予測するという方向性だけではなく，自我脅威にさらされ自己評価が変動しやすい状況が，自己愛を高めているという因果の方向性を考える必要がある。自己愛が自己評価に脅威

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

を与える種々の原因（例えば発達的要因）によって高められているとすれば，自己愛は特性的，安定的なものではなく，より状況的（発達的）なものである。実際，これまでの研究で青年期や妊娠期，更年期において自己愛が高まることが示されてきている（細井, 1981, 1984；中山・中谷, 2006；相良, 2006）。これらの時期は身体的特徴が大きく変化するなど，自己評価が（自己愛の効果ではなく）生理的な要因から必然的に揺れ動くと考えられる。よって，発達的な現象として扱われる自己愛傾向について明らかにするには，自己愛と自我脅威の感じやすさの（因果）関係について，今後，より慎重な議論が必要であると考えられる。

自己評価を「調整」するとともに，「形成」していく段階にある青年の適応にとって，自己愛は重要な意味を持っている可能性がある。すなわち，青年期は児童期までの非現実的な夢や目標を，進路や職業というより現実的な目標へと変化させなければならない発達段階である。このような時期において一般的に自己評価は低下しがちであるが，自己愛の機能により，高い目標をできるだけ維持し，ターゲットとなる領域のパフォーマンスを上げようとするなど，高い動機づけを保つことができると考えられる。なおこれに関して，自己愛的な人が，内的な空虚さ（boredom）を埋めるために変化と興奮を求める傾向があることが示されている（Wink & Donahue, 1997）。その理論的背景から，自己愛は病理的なものとして議論されがちであるが，今後，青年期発達における適応的な自己愛の機能に着目した研究がなされることが望まれる。

他の心的機能（ポジティブイリュージョン，自尊感情）と自己愛の相違点が先行研究においていくつか検討され，自己愛が他の心的機能とは異なる自己調整機能をもつことが明らかにされた。自己調整は適応上，生涯にわたって重要であると考えられるが，自己愛は青年特有のものとして扱われる。これらのことから，成人期以降の自己調整方略が青年期のそれとは質的に異なってくる可能性も示唆される。しかしこれまでの研究ではほとんど大学生が対象とされており，青年期の特殊性について議論することは不可能である。自尊感情など，他の心的機能がもつ自己調整効果をさらに詳細に検討すると共に，成人期以降の自己愛，自己調整についても検討していく必要があるだろう。

さらに，本稿では主にNPIによって測定された自己愛に関する知見について概観したが，NPIによってほとんど扱われていない「過敏型」の側面については議論を行わなかった。近年，「過敏型」の自己愛の存在が指摘され，自己愛が主にNPIによって扱われてきた「誇大型」とこの「過敏型」の組み合わせによって捉えられることが明らかにされている（Gabbard, 1989, 1994；Wink, 1991）。そして特に日本においてはこの2側面により自己愛を捉える枠組みが積極的に採用されている（相澤, 2002；中山・中谷, 2006；小塩, 2002；高橋, 1998；谷, 2004など）。今後，この「過敏型」の特徴が自己調整過程においてどのような役割を果たしているのかということについて検討していく必要がある。

おわりに

最後に，本稿の意義について述べる。本稿では，これまでに国内外でなされた自己愛研究を自己調整という視点から広く概観し，自己愛的自己調整に関する理論モデルを提案した。このような観点は，自己愛的になりがちであるとされる青年が，数多く経験する評価事態をどのように捉え，それを受けてその後どのように行動するのかということについて理解する上で有意義である。また，本稿で示されたモデルにより，自己愛の適応性に関する詳細な議論や，介入の計画が可能になると考えられる。すなわち，本稿で示されたモデルは，一般青年における自己愛のメカニズムを，自尊感情などの他の心的機能や自己愛人格障害におけるメカニズムと比較検討し，自己愛と他の心的機能，または一般青年の自己愛と障害レベルの自己愛について認知・感情・行動の側面からの詳細な比較を行うことを可能にする。これを用いることで，自己愛と他の心的機能とが，あるいは一般青年の自己愛と病理的な自己愛（自己愛人格障害）とが具体的にどの部分で異なっているのかが明らかにされ，個人が適応的な自己調整を実現するために知見を役立て，援助を考えることが可能になると考えられる。

以上のような意義により，今後，自己調整的な枠組みからの自己愛研究がさらに蓄積されることが期待される。

引用文献

阿部晋吾・高木　修　(2006). 自己愛傾向が怒り表出の正当性評価に及ぼす影響　心理学研究, **77**, 170-176. (Abe, S., & Takagi, O. (2006). The influences of narcissism on the justifiability evaluation of anger expression. *Japanese Journal of Psychology*, **77**, 170-176.)

相澤直樹　(2002). 自己愛人格における誇大特性と過敏特性　教育心理学研究, **50**, 215-224. (Aiz-

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

awa, N. (2002). Grandiose traits and hypersensitive traits of the narcissistic personality. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **50**, 215-224.)

Ang, R. P., & Yusof, N. (2005). The relationship between aggression, narcissism, and self-esteem in Asian children and adolescents. *Current Psychology : Developmental・Learning・Personality・Social*. Summer 2005, **24**, 113-122.

Bach, S. (1977). On the narcissistic state of consciousness. *International Journal of Psychoanalysis*, **58**, 209-233.

Baumeister, R. F., & Boden, J. M. (1998). Aggression and the self : High self-esteem, low self-control, and ego threat. In R. Geen & E. Donnerstein (Eds.), *Human aggression : Theories, research, and implications for social policy* (pp. 111-137). San Diego, CA : Academic Press.

Baumeister, R. F., Bushman, B. J., & Campbell, W. K. (2000). Self-esteem, narcissism, and aggression : Does violence result from low self-esteem or from threatened egotism ? *Current Directions in Psychological Science*, **9**, 26-29.

Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression : The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*. **103**, 5-33.

Bem, S. L. (1981). *The Bem Sex Role Inventory : Professional manual*. Palo Alto, CA : Consulting Psychologists Press.

Blaine, B., & Crocker, J. (1993). Self-esteem and self-serving biases in reaction to positive and negative events : An integrative review. In R. F. Baumeister (Ed.), *Self-esteem : The puzzle of low self-regard* (pp.55-85). New York : Plenum Press.

Bond, A. J., Ruaro, L., & Wingrove, J. (2006). Reducing anger induced by ego threat : Use of vulnerability expression and influence of trait characteristics. *Personality and Individual Differences*, **40**, 1087-1097.

Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. (1998). Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression : Does self-love or self-hate lead to violence ? *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 219-229.

Campbell, W. K., Reeder, G. D., Sedikides, C., & Elliot, A. (2000). Narcissism and comparative self-enhancement strategies. *Journal of Research in Personality*, **34**, 320-347.

Campbell, W. K., Rudich, E. A., & Sedikides, C. (2002). Narcissism, self-esteem, and the positivity of self-views : Two portraits of self-love. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 358-368.

Collani, G. V., & Werner, R. (2005). Self-related and motivational constructs as determinants of aggression. : An analysis and validation of a German version of the Buss-Perry Aggression Questionnaire. *Personality and Individual Differences*, **38**, 1631-1643.

Emmons, R. A. (1984). Factor analysis and construct validity of the Narcissistic Personality Inventory. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 291-300.

Emmons, R. A. (1987). Narcissism : Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 11-17.

Farwell, L., & Wohlwend-Lloyd, R. (1998). Narcissistic processes : Optimistic expectations, favorable self-evaluations, and self-enhancing attributions. *Journal of Personality*, **66**, 65-83.

Gabbard, G. O. (1989). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, **53**, 527-532.

Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic personality in clinical practice. : The DSM-IV edition.* Washington, DC. : American Psychiatric Press.

Helmreich, R., & Stapp, J. (1974). Short forms of the Texas Social Behavior Inventory : An objective measure of self-esteem. *Bulletin of the Psychonomic Society*, **4**, 473-475.

日比野桂・湯川進太郎・小玉正博・吉田富士雄 (2005). 中学生における怒り表出行動とその抑制要因―自己愛と規範の観点から― 心理学研究, **76**, 417-425. (Hibino, K., Yukawa, S., Kojima, M., & Yoshida, F. (2005). Anger expressive behaviors and its inhibitory factors in Japanese junior high school students : From the aspect to narcissism and norms. *Japanese Journal of*

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Psychology, **76**, 417-425.)

Horney, K. (1950). *Neurosis and human growth.* New York : Norton.

細井啓子 (1981). ナルシシズム的傾向に関する発達的研究(1)―妊産婦について― 心理学研究, **52**, 38-44. (Hosoi, K. (1981). A developmental study of narcissistic tendency (1) : Women in pregnancy and confinement. *Japanese Journal of Psychology*, **52**, 38-44.

細井啓子 (1984). ナルシシズム的傾向に関する発達的研究(3)―成人期中期の女性について― 心理学研究, **55**, 113-116. (Hosoi, K. (1984). A developmental study of narcissistic tendency (3) : In middle-aged women. *Japanese Journal of Psychology*, **55**, 113-116.)

Jackson, L. A., Ervin, K. S., & Hodge, C. N. (1992). Narcissism and body image. *Journal of Research in Personality*, **26**, 357-370.

John, O. P., & Robins, R. W. (1993). Determinants of interjudge agreement on personality traits : The Big Five domains, observability, evaluativeness, and the unique perspective on the self. *Journal of Personality*, **61**, 521-551.

John, O. P., & Robins, R. W. (1994). Accuracy and bias in self-perception : Individual differences in self-enhancement and the role of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 206-219.

上地雄一郎・宮下一博 (1992). 自己愛の発達と障害およびその測定に関する研究の概観[2] 岡山県立短期大学紀要, **37**, 118-127.

Kernberg, O. (1975). *Borderline conditions and pathological narcissism.* Northvale, NJ : Jason Aronson.

Kernis, M. H., & Sun, C. (1994). Narcissism and reactions to interpersonal feedback. *Journal of Research in Personality*, **28**, 4-13.

小平英志 (2002). 女子大学生における自己不一致と優越感・有能感, 自己嫌悪感との関連―理想自己と義務自己の相対的重要性の観点から 実験社会心理学研究, **41**, 165-174.

Kohut, H. (1977). *The restoration of the self.* New York : International University Press.

Leary, T. (1956). *A manual for the use of the interpersonal system of personality.* Berkeley, CA : Psychological Consultation Service.

Linvile, P. W. (1985). Self-complexity and affective extremity : Don't put all your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, **3**, 94-120.

Morf, C. C., & Rhodewalt, F. (1993). Narcissism and self-evaluation maintenance : Explorations in object relations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**, 668-676.

Morf, C. C., Weir, C. R., & Davidov, M. (2000). Narcissism and intrinsic motivation : The role of goal congruence. *Journal of Experimental Social Psychology*, **36**, 424-438.

中山留美子 (2005). 自己愛における誇大性, 評価過敏性と同一性の感覚の関連 日本教育心理学会第47回総会発表論文集, 235.

中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的変化の検討 教育心理学研究, **54**, 188-198. (Nakayama, R., & Nakaya, M. (2006). Developmental transformation of narcissism in adolescents. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **54**, 188-198.)

小塩真司 (1997). 自己愛傾向に関する基礎的研究―自尊感情, 社会的望ましさとの関連 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), **44**, 155-163.

小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290. (Oshio, A. (1998). Relationships among narcissistic personality, self-esteem, and friendship in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 280-290.)

小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, **10**, 35-44. (Oshio, A. (2001). Narcissistic personality, instability of self-image, and level of self-esteem and its stability. *Japanese Journal of Personality*, **10**, 35-44.)

小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み―対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴― 教育心理学研究, **50**, 261-270. (Oshio, A. (2002). Narcissism, interpersonal relationships, and adaptation : Two types of narcissism in young adults. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **50**, 261-270.)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版

小塩真司・小平英志 (2005). 自己愛傾向と理想自己：理想自己の記述に注目して 人文学部研究論集, **13**, 37-54.

Pelham, B. W., & Swann, W. B. (1989). From self-conceptions to self-worth : On the sources and structure of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 672-680.

Pulver, S. (1970). Narcissism : The term and concept Psychoanalytic. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **18**, 319-341.

Raskin, R., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.

Raskin, R., Novacek, J., & Hogan, R. (1991). Narcissistic self-esteem management. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 911-918.

Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principal-components analysis of the Narcissistic Personality Inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 890-902.

Reich, A. (1960). Pathological forms of self-esteem regulation. *Psychoanalytic Study of the Child*, **15**, 139-148.

Rhodewalt, F. (2001). The social mind of the narcissist : Cognitive and motivational aspect of interpersonal self-construction. In J. P. Forgas, K. D. Williams, & L. Wheeler (Eds.), *The social mind : Cognitive and motivational aspects of interpersonal behavior* (pp.177-198). Cambridge, UK : Cambridge University Press.

Rhodewalt, F., & Eddings, S. K. (2002). Narcissus reflects : Memory distortion in response to ego-relevant feedback among high and low narcissistic men. *Journal of Research in Personality*, **36**, 97-116.

Rhodewalt, F., Madrian, J. C., & Cheney, S. (1998). Narcissism, self-knowledge, organization, and emotional reactivity : The effect of daily experience on self-esteem and affect. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 75-87.

Rhodewalt, F., & Morf, C. C. (1995). Self and interpersonal correlates of the Narcissistic Personality Inventory : A review and new findings. *Journal of Research in Personality*, **29**, 1-23.

Rhodewalt, F., & Morf, C. C. (1998). On self-aggrandizement and anger : A temporal analysis of narcissism and affective reactions to success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 672-685.

Rhodewalt, F., Sanbonmatsu, D. M., Tschanz, B., Feick, D. L., & Waller, A. (1995). Self-handicapping and interpersonal trade-offs : The effects of claimed self-handicaps on observers' performance evaluations and feedback. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 1042-1050.

Rhodewalt, F., Tragakis, M. W., & Finnerty, J. (2006). Narcissism and self-handicapping : Linking self-aggrandizement to behavior. *Journal of Research in Personality*, **40**, 573-597.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press.

相良麻里 (2006). 青年期における自己愛傾向の年齢差 パーソナリティ研究, **15**, 61-63. (Sagara, M. (2006). Age differences in narcissistic tendency in adolescence. *Japanese Journal of Personality*, **15**, 61-63.)

Sedikides, C., Rudich, E. A., Gregg, A. P., Kumashiro, M., & Rusbult, C. (2004). Are normal narcissists psychologically healthy? : Self-esteem matters. *Journal of Personality and Social Psychology*. **87**, 400-416.

Showers, C. (1992 a). Evaluatively integrative thinking about characteristics of the self. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 719-729.

Showers, C. (1992 b). Compartmentalization of positive and negative self-knowledge : Keeping bad apples out of the bunch. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 1036-1049.

Shrauger, J. S. (1975). Responses to evaluation as a function of initial self-perceptions. *Psychological Bulletin*, **82**, 581-596.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Smalley, R. L., & Stake, J. E. (1996). Evaluating source of ego-threating feedback : Self-esteem and narcissism effects. *Journal of Research in Personality*, **30**, 483-495.

Soares, A. T., & Soares, L. M. (1965). *Self-Perception Inventory*. Trumbull, CT : ALSO Corporation.

South, S. C., Oltmanns, T. F., & Turkheimer, E. (2003). Personality and the derogation of others : Descriptions based on self- and peer report. *Journal of Research in Personality*, **37**, 16-33.

Strolow, R. D. (1975). Toward a functional definition of narcissism. *International Journal of Psychoanalysis*, **56**, 179-185.

Stucke, T. S. (2003). Who's to blame ? Narcissism and self-serving attributions following feedback. *European Journal of Psychology*, **17**, 465-478.

Stucke, T. S., & Sporer, S. L. (2002). When a grandiose self-image is threatened : Narcissism and self-concept clarity as predictors of negative emotions and aggression following ego-threat. *Journal of Personality*, **70**, 509-532.

高橋智子 (1998). 青年のナルシシズムに関する研究—ナルシシズムの2つの側面を測定する尺度の作成— 日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 147.

谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造：多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成 教育心理学研究, 49, 265-273. (Tani, F. (2001). Structure of the sense of identity in adolescents : Development of the Multidimensional Ego Identity Scale (MEIS). *Japanese Journal of Educational Psychology*, **49**, 265-273.)

谷 冬彦 (2004). 新たなる自己愛人格尺度の作成(1)—因子構造と対人恐怖的心性との弁別性の確認— 日本心理学会第68回大会発表論文集, 69.

Taylor, S. E. (1989). *Positive illusions : Creative self-deception and the healthy mind*. New York : Basic Books.

Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being : A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.

Tschanz, B. T., & Rhodewalt, F. (2001). Autobiography, reputation, and the self : On the role of evaluative valence and self-consistency of the self-relevant information. *Journal of Experimental Social Psychology*, **37**, 32-48.

Twenge, J. M., & Campbell, W. K. (2003). "Isn't it fun to get the respect that we're going to deserve ?" Narcissism, social rejection, and aggression. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 261-271.

Wallace, H. M., & Baumeister, R. F. (2002). The performance of narcissists rises and falls with perceived opportunity for glory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 819-834.

Washborn, J. J., McMahon, S. D., King, C. A., Reinecke, M. A., & Silver, C. (2004). Narcissistic features in young adolescents : Relations to aggression and internalizing symptoms. *Journal of Youth and Adolescence*, **33**, 247-260.

Watson, P. J., Taylor, D., & Morris, R. J. (1987). Narcissism, sex roles, and self-functioning. *Sex Roles*, **16**, 335-350.

Westen, D. (1990). The relations among narcissism, egocentrism, self-concept, and self-esteem : Experimental, clinical, and theoretical considerations. *Psychoanalysis and Contemporary Thought*, **13**, 183-239.

Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 590-597.

Wink, P., & Donahue, K. (1997). The relation between two types of narcissism and boredom. *Journal of Research in Personality*, **31**, 136-140.

Winstead, B. A., & Cash, T. F. (1984). Reliability and validity of the Body-Self Relations Questionnaire : A new measure of body image. *Paper presented at the meeting of the Southeastern Psychological Association*, New Orleans, LA.

湯川進太郎 (2003). 青年期における自己愛と攻撃性—現実への不適応と虚構への没入をふまえて— 犯罪心理学研究, **41**, 27-36. (Yukawa, S. (2003). Narcissism and aggression in young adults : Relationship with maladjustment to reality and absorption in fiction. *Journal of Criminal Psychology*, **41**, 27-36.)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

湯川進太郎 (2006). 怒りのメカニズム—攻撃との関連から 児童心理, **60**, 1163-1168.

謝　辞

本論文の執筆にあたり，有益なコメントを下さいました査読者の先生方に，深く感謝致します。

(2006.11.10 受稿, '07.8.3 受理)

Narcissistic Self-Regulation Process : A Review and Perspective

Rumiko Nakayama (Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University) *Japanese Journal of Educational Psychology, 2008, 56, 127—141*

Narcissism is a key concept for understanding adolescents. However, even though multitudes of studies of narcissism have been conducted, the meaning of that concept has rarely been discussed. The present article reviews recent studies of normal narcissism, and tries to capture findings from the viewpoint of self-regulation. Main topics discussed include (1) ego threats for the narcissist as a control variable, and (2) similarities and differences between narcissism and similar constructs. A process model is proposed, made up of situations, objects of control, and choice of strategies, and the need for further research based on this model is discussed.

Key Words : narcissism, narcissistic self-regulation process, ego threat, Narcissistic Personality Inventory (NPI), adolescence

NII-Electronic Library Service